



金山先生、音楽の友にて称讃

今月号(3月号)の「音楽の友」誌の、海外レポートのコーナーで、USA担当の太田健氏のレポートによる

“金山隆夫、NSOで《メサイア》熱演”

という記事(とても大きな写真つき!)が掲載されました。

記事は簡単なプロフィール紹介とともに、昨年11月の定期演奏会(メインはラフマニノフ2番)に続いての登場となった、12月の定期でのメサイア公演についてレポートしており、

金山は緻密かつ絢爛なこのオラトリオを忠実に解釈し、美しく仕上げた。

と称讃されています。同記事によれば、ワシントン・ポスト紙での批評にも「さすがに魅力的な成功をおさめた」と好評だった模様。

同記事は、

金山は、昨年に引き続き、この夏もウォルフ・トラップ(ワシントン郊外にあるNSOの夏の本拠地)で再び指揮棒を手にする。今後ますますの活躍を期待したい。

と、結ばれています。

皆で我が常任指揮者を応援しよう!

(16年来の知己)

第12回演奏会に向けて (まとめ)

やや気はよい案内ですが、第12回演奏会の実施要領は以下のとおりです。

第12回演奏会

日時: 2000年8月26日(土)

1800 or 1830 開演予定

場所: ティアラこうとう大ホール

指揮: 金山 隆夫(常任指揮者)

ドヴォルザーク: 交響曲第9番「新世界から」
J.ウィリアムス: 映画音楽集(詳細下記)

シンドラーのリスト ~ テーマ

ET ~ 地上の冒険

プライベート・ライアン ~ 戦没者への讃歌
スター・ウォーズ よりセレクション

次回の参加登録

次回演奏会への参加受け付けを開始します。本番後のレセプションで記入用紙は用意しますので、継続参加を希望する方は、人事担当 吉田さん(Cb)へ提出をお願いします。

いつも参加している人も、今回(第11回)から参加の方も、今回はエキストラで参加していただいた方も、是非、継続参加していただけることを、事務局一同、願っております。

次回へ向けての総会

下記日程にて、総会を開催します。今後のディマンシュ運営に関心のある方は是非ご参加ください。

日時: 3月26日(日) 1300 - 1700

場所: 森下文化センター第2・3会議室

(文責広報)

特集: 本番直前必読! あしたのために

いよいよ明日が本番となりました。ラフマニノフはともかくとして、チャイ4などは超有名な曲なので、解説不要かと思っていたところ、意外にもあまり曲の背景が知られていないようなので、今頃渡すなよ~という声も聞こえそうですが、

「あしたのために」

と題して、今回の演目を演奏するにあたって知っておくべきこと(と思われること)を特集します。

是非とも、脇を締めてえぐるように... ぢゃなくて(失礼!)、眠い目をこすってでも、読むべし、読むべし、読むべし!

チャイコフスキー編

2ヶ月の結婚生活

旧ソ連政府は体面上否定していたものの、チャイコフスキーが同性愛者であったことは、現在では事実であると認められています。

しかし、チャイコフスキーは、その生涯に一度だけ結婚していました。音楽院の通信教育の生徒(しかし、面識はなかった)で、10歳近く年下のミリューコヴァという女性に、熱烈にアタックを受けた彼は、そのストーリー的熱意(?)に押されてやむなく結婚を同意します。しかし、モーツァルトの妻コンスタンツェと並んで、音楽史上最悪の悪妻として知られるこの女性との生活がうまくいくはずもなく、1ヶ月程でチャイコフスキーは家出します。その後、連れ戻された彼は、2週間後に再び家出、自殺を試みるまでに精神的に追い詰められ、一時は人事不省であったのを、見かねた弟がイタリアへ療養に連れ出

し、以後、ミリューコヴァとは一度も会わなかったといえます。

彼女との結婚直前から、イタリアで健康を回復し、めでたく(?)ミリューコヴァと別れることができた時期まで、ちょうどこの人生最大の波瀾の時期が、交響曲第4番の作曲を開始し、終楽章を書き上げるまでの時期にぴたりとあっています。いうなれば、チャイコフスキーは、みのもんたのTV番組に出演するかわりに、思いのたけを音楽で表現したということでしょう(しかも、ヤラセではない)。

チャイ4の標題

さらに、ちょうどこの時期から14年間にわたって年金援助を行った(しかし生涯に一度も会わなかった)富豪の未亡人メック夫人との文通が開始されており、メック夫人宛の手紙の中で、彼はこの交響曲について「この交響曲は標題を持っており、それはつまり総て言葉で説明できるということだ」

(傍点筆者)

と、説明しています。このように明確な解題がされている作品は珍しく、貴重な資料となっています。これを読むと、如何に交響曲の内容が当時のチャイコフスキーをとりまく状況と一致しているかが如実に理解できます。なお、この作品の冒頭に掲げられた献呈の辞には「我が最も良き友に」とありますが、この「良き友」がメック夫人であることは明らかでしょう。

以下は、各楽章についてのチャイコフスキー自身による解説です(ただしイタリアックは筆者註)。

第一楽章

序奏はこの交響曲全体の中核、精髓、主想です。(冒頭の譜=金管のファンファーレ)これは“運命”です。即ち、幸福への追求

が目的をつらぬくことを妨げ、平和と慰安が全うされないことや、空にはいつも雲があることを嫉妬深く主張している宿命的な力です。頭上にいつも垂れ下がっている“ダモクレスの剣”(註*)のように揺れ、魂に絶えず毒を注ぎ込む力です。ですからこれに服従して、密かに不運をかこつより仕方ありません。(第一主題の譜 = 27小節めからの弦)絶望は激しくなります。逃避して夢に浸るのがよいでしょう。(第二主題の譜 = 116小節めからのC1)なんとこの嬉しさでしょう。甘い柔らかい夢が私を抱きます。明るい世界が私を呼びます。魂は夢の中に浸って憂愁と不快は忘れられます。これが幸福です。しかし夢でしかありません。運命は我々を残酷に呼び覚まします。(練習番号Kの後)我々の生活は悩ましい現実と、幸福な夢の交錯にすぎないのです。安全な避難所は在りません。人生の波は我々を揉んだ後に我々を呑込んでしまうのです。

註* : ダモクレスの剣 ... ダモクレス [Damokles]: 紀元前4世紀前半のシラクサ(シラクサ)の人。シチリアのシラクサの王ディオニュシオス一世の廷臣。生没年不明。ディオニュシオスにおべっかを使って、その幸福を褒め称えた。ディオニュシオスは彼を豪華な宴会に招いて、頭上に一本の馬の尾毛で抜き身の剣をぶら下げた席に彼を座らせ、王の幸福が常に危機不安と共にあることを教えた。この話はキケロによって伝えられ、常住身に迫る危険を意味する<ダモクレスの剣>ということわざが出来た。転じて身に迫る危険、危険の上にある幸福についても<ダモクレスの剣>:[the sword of Damokles]と呼ぶ、

(筆者註: 思うに、夢の中に本当に逃避するのは練習番号Uの箇所であろう。すなわち、ここは夢のように美しく演奏しなければならない、と思うのですが、いかがでしょうか。

ちなみに、バーンスタインは教育番組“ Young Peoples Concert ”の中で、練習番号0の部分について、「欲しいものがあるのに買ってもらえない時、“欲しい~買って~ねー買ってよ~ (I want, but I want....)”とねだるだろう?それでも買ってもらえなかったら、だんだん興奮して最後には泣き出してしまおう(練習番号P)んだ!」と解説している。

なお、この楽章の形式を念のため示すと
序奏 1小節~
提示部 第一主題 27小節~
第二主題 116小節~
展開部 練習番号L~
再現部 284小節~
結尾 練習番号U~

でしょう。こうした構成を把握することで、一歩踏み込んだ演奏ができると思いますので、形式のはっきりした作品を演奏する時にはちょっと気をつけてみてはどうかということをご提案します。つまり、提示部で練習したことは、そのまま再現部で応用できる、ということですよ。

第二楽章

第二楽章は悲哀の他の一面を示します。ここに表されるのは、仕事に疲れ果てた者が、夜半ただ独り家の中に坐っている時彼を包む憂鬱な感情です。読もうと思って持ち出した本は彼の手から滑り落ちて、多くの思いでが湧いてきます。こんなにも多くの色々なことが、みんな過ぎてしまった、去ってしまったというのは、なんとという哀しさでしょう。それでも昔を想うのは楽しいことです。私達は過去を嘆き懐かしみま

すが、新しい生き方を始めるだけの勇気も意志もありません。私達は生活に疲れ果てたのです。

(筆者註: 次のような場面でしょうか。

夜も更けてひとり家に帰ってくる。窓の外は雪。ランプをつけて、凍った窓辺にぐったりと座りこむ。ああ、今日も疲れちゃった。なんで毎日こんなことしなきゃならんのだ。ふと目をやれば、そこにはかつての友人達または昔の恋人の色褪せた写真。ああ、昔はよかったよなあ。楽しかったよなあ。脳裏に浮かぶダンスも心なしか重い足どり。

392小節めからのHr、木管、弦の交互の延ばしは、深あ~~~~い嘆息、だと思いますが、いかがでしょうか。)

第三楽章

第三楽章には、これとってはっきりとした情緒も確定的な表出もありません。ここにあるのは気紛れな唐草模様です。我々が酒を呑んで些か酩酊した時に我々の脳裏に滑り込んでくるぼんやりした姿です。その気分は陽気になったり悲嘆に満ちたりクルクルと変わります。別にとりよめて何のことを考えているのではなく、空想を勝手気儘に走らせると、素晴らしい線の交錯による画面が楽しめます。たちまちこの空想の中に、酔っ払いの百姓と泥臭い唄との画面が飛び込んできます(Meno mossoからの木管)。遠くから軍楽隊の奏楽して通る音が聞こえます(Tempo Iからの金管)。これらは皆、眠る人の頭の中を行き交うばらばらな絵なのです。現実とは何の関係もありません。それらは訳の分からぬ混乱したデタラメです。

(筆者註: 次のような場面を思い描いてみてください。

こんな夜は酒でも呑まねばやっておれん。酒は勿論、キンキンに冷やしたウォッカ~それも赤唐辛子を漬け込んだペルツォフカ~を、ストレートでちびちび舐める(以上、曲間)。酔いが回ってきたら、何やら目の前に星がくるくる回りはじめる(ピツィカートが始まる)。ぼわあ~んといいい気持ち。

というわけで、へろへろ状態の曲ですな。本番後に存分に味わってみましょう?!)

第四楽章

あなたが自分自身の中に歓喜を見出せなかったら、あたりを見回すがよい。人々の中に入って行くがよい。人々がどんなに生を楽しみ、歓楽に身を打ち込むかを見るがよい。民衆の祭りの日々の描写(10小節めからの第二主題は「白樺」あるいは「野に立つ樺の木」と呼ばれるロシア民謡)。人々の幸福の姿を見て、我々が己を忘れるか忘れないかのその時、不敗の運命は再び我々の前に現れてその存在を思い起こさせる(199小節めのAndante)。人の子らは我々に関心を持たない。彼等は我々を顧みもせず、また我々が寂しく哀しいのを見んがために足をとどめようとしぬ。なんと彼等は愉快そうで嬉しそうであることか。彼等の感情は無邪気で単純なのだ。それでも貴方は「世は悲哀に沈んでいる」というだろうか。幸福は、単純素朴な幸福は、なお存在する。人々の幸福を喜びなさい。そうすれば貴方はなお生きてゆかれる。

(筆者註: あくまでも“自分自身の境遇が幸せなのではない”ところがミソ。そう考えると、

なんと哀しい曲であることか！松本零士の大
四畳半の男の世界だ！？)

もちろん、ここに書かれた場面・イメージ
だけがこの作品の総てではないと思います。
三者三様の解釈が成り立ちます。しかし、か
ように作曲家自身がこのような詳解をしてい
る以上、演奏者が何かしらのイメージを持っ
て演奏するのと、単なる音符の羅列にするの
とでは大きな違いがあるのは事実であること
を念頭に置くべきであると考えます。

出典：名曲解説全集（音楽の友社刊）第二巻

ラフマニノフ編

♪純露西亞作曲家

ラフマニノフは、スクリャーピンと同門で
したが、その作風は大きく異なります。後の
ロシア・アヴァンギャルドにも通じる前衛性
を持ったスクリャーピンに対し、ラフマニノ
フは終生、徹底的にロマン的であり続けまし
た（ストラヴィンスキーはラフマニノフのこ
とを作曲家としては認めなかったといいま
す）

革命の混乱を避けるために一時的に国外へ
避難したことが、結果として亡命となり、ラ
フマニノフは以後、生涯にわたって祖国ロシ
アの地を踏むことができませんでした。同時
に、それは、彼の作曲の源泉が断ち切られた
ことも意味していたと考えられます。事実、
アメリカ時代に作曲された作品番号のついた
作品は25年間に僅か6曲に過ぎないのです。

♪ラフマニノフの人生交響曲

交響的舞曲は、ラフマニノフの生涯最後の
作品です。プログラムの解説にも記述しまし

たが、この作品はもともと人生を暗示する標
題がつけられていました。しかもそれは最初
は“朝”“昼”“黄昏”であったのを、後述の
タイトルに変更していることから、より人生
の終焉を意識したものになっているといえま
す。また、彼の作品のトレードマークともい
える「怒りの日」がふんだんに使われていま
す。

元ロシア・バレエ団の振付師ミハイル・
フォーキンの舞踊のために構想されたものの、
フォーキンの死によって頓挫した舞踊音楽作
曲のプランを、ラフマニノフは最晩年に、交
響曲と同じ重みを持った作品にしたのです
(事実、この作品を実質上の第四交響曲と見る
むきもあります)。作曲しはじめてから約1ヶ
月で完成され、管弦楽スコアと同時に作られ
たピアノ連弾譜の私的なお披露目ではラフマ
ニノフとホロヴィッツが連弾したそうです。

当初「幻想舞曲」と題されていたこの作品
は、舞台作品ではなく交響作品としての現在
のタイトルに改められました。

なお、この作品は、当時ラフマニノフ作品
の演奏のエキスパートとされていた、ユージ
ン・オーマンディとフィラデルフィア管弦楽
団に献呈され、初演されています。

以下に、それぞれの楽章のポイントを解説
しましょう。

(ちなみに、「怒りの日」って何？という人は、
まずベルリオーズの幻想交響曲第5楽章を聴
きましょう。その次にはハチャトゥリアンの
第二交響曲第三楽章を聴きましょう。)

第一楽章

もともとは“noon: 昼”(=青年期)と題さ
れていました。この楽章の白眉は、コーダで
フラッシュバック的に引用される、第一交響
曲の第一主題(27番3小節前から)です。こ
の第一交響曲は、ラフマニノフ22歳の時の新

進作曲家・指揮者として“燃えて”いた時期
の作品だったのですが、グラズノフ指揮によ
る初演は悲惨な失敗(当時としては新しすぎ
た)に終わり、ラフマニノフはショックのあ
まり心神喪失状態になってしまいました。生
涯最後の作品に、青年期の、しかも苦杯を舐
めた曲を引用するとは、何やら思わせぶりで
はないですか！しかも、この第一交響曲第一
主題、よく聴いてみれば、そう「怒りの日」
なのですよ！

第二楽章

もともとは“twilight 黄昏”(=壮年期)
と題されていました。これは、『ラ・ヴァル
ス』を彷彿とさせる、所謂“死の舞踊”です。
さしずめ、ミュートで強奏する金管は、怪し
げな扉が開く合図でしょうか。

第三楽章

もともとは“midnight 真夜中”(=老年期)
と題されていました。素材的には、「怒りの
日」が中心で、いきなり木管に提示されるほ
か、ほとんどのフレーズが「怒りの日」です
(スコアを読まずとも、聴けば明らかですね)。
それに対して、64番のあと、最初に Picc& Fl
で、その後 Va から始まる変拍子的メロディ
は、ラフマニノフの無伴奏合唱曲『晚禱』の
第9曲「主や、爾を崇め賛えん」の後半部分
(イエス復活を謳う場面)のもので、つま
り、「死」と「生(復活)」が対比されるので
す。また、99番2小節めからの Tr のメロ
ディは、同合唱曲の中でも「アレルヤ！」と
いう歌詞がついている部分の引用で、スコア
にもそう記されています。

ちなみにスコアをお持ちの方はお気付きか
と思いますが、最後の銅鑼は、八分音符では
なく符点四分音符で記されているので、響き
を止めずに残すのが正しい解釈であると思

ます。今回の演奏でも残しますので、弾き終
わって「はぁ～」と気を抜かないように注意
してください。ここは拍手されたら「負け」
です！

今回のプログラムの意図

と、いうわけで、今回のプログラムの意図
するところは、

全くもってロシア的な作曲家の作っ
た、“運命と人生”についての作品
です。チラシヤパンフレット表紙のデザイン
は、“運命と人生”のロシア語訳です。



これは、ラフマニノフが『交響的舞曲』の最
後に書き付けた「神よ、あなたに感謝します」
という一文です(出版された楽譜からは削除
されています)。

(なお、デザインにあたって、ロシア語訳は
テューバ阿部氏の協力を得ました。ご紹介す
ることで謝辞にかえさせていただきます。「ど
～～も！」)

(by 今回のプログラム案提案者)

編集後記

いよいよ、明日が本番！いつもながら、ぎりぎり
になってしまいます。準備万端で、明日は美
味しいビールを飲めるよう、頑張りましょう！

(わし)